「川のあるまち」第３２号

越谷市内のさまざまな庚申塔

加藤幸一

（１）庚申信仰

庚申信仰は、人間の体の中に潜んでいる三尸（三匹の尸虫）が、六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。それゆえ庚申の日の夜は三尸が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないという。そこで、庚申講の仲間達（男性に限る）が一堂に会して徹夜して過ごし、鶏の鳴き声が聞こえる頃に解散するという。その記念として建立された石塔が庚申塔である。

（２）庚申塔

石仏で最も興味を引くのは、全国どこにでもある庚申塔である。その像容は、長野県安曇野の双体道祖神とともに石仏への関心を持つきっかけとなる。

庚申塔は、腕が六本ある青面金剛という仏様の像容を刻んでいる。図１は中央の手が合掌している合掌型、図２は右手に剣を持ち、左手に「ショケラ」と呼ばれる女人を持つ剣人型である。図３のように「青面金剛」とか「庚申塔」などと文字で刻んだ庚申塔もある。

青面金剛は、怖い顔をし、手が六本あり、それぞれの手にさまざまな武器を持っている。最上部には太陽や月が描かれ、脇には二鶏（雌雄）が描かれていることがある。足元には鬼を踏み潰し、その下には見ざる、聞かざる、言わざるの三猿が描かれている。

図４は、天保九年（一八三八）に建立した青面金剛の御利益を福徳、知恵、官位、長命など一から始まって十まで記した石塔である。題字は「青面金剛上師十誓願定朝之御作」と刻まれている。庚申塔ではないが、庚申信仰の研究にとっては参考になる。

その他に「猿田彦大神」と書かれたり、越谷市内にはないが猿田彦の像容を刻んでいたりする神道系庚申塔も見られる。図５は、野田市内にある猿田彦の庚申塔である。

（３）地域限定の岩槻型庚申塔

「ショケラ」と呼ばれる女性の髪の毛を左手に持った

庚申塔は、図2のように右手に剣を持つ剣人型である。しかし図6～9の四基はショケラを持ち合掌もし、鬼は正面を向き三猿も全て正面を向く庚申塔である。岩槻を中心に見られるので、中山正義氏は岩槻型と呼んでいる。なお図10と11は、鬼が横に伏して正面を向き、三猿は左右の猿のみ向き合っている珍しい例である。造立時期も宝暦年間あたりに限定されているようで、秦野秀明氏はこれを「越谷型」と命名した。

（4）越谷市が誇る秀作の庚申塔

①観照院の宝暦十四年（一七六四）の庚申塔

図12は、最上部には青面金剛を表す梵字「ウーン」が刻まれている。青面金剛の頭光は火炎の輪光背である。頭髪にはドクロが描かれている。腕や足には蛇が絡みついているのが珍しい。青面金剛の周囲には、三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）や二鶏（雌雄）、二鬼が見られる。さらに四夜叉を伴っているのは珍しく、筋肉が隆々と表現されている。この庚申塔は台石の両側面をみると男女が協力して奉納したことがわかる。

②大聖寺の天保十年（一八三九）の庚申塔

図13は、上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は、頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇が見られる。顔つきは、忿怒の形相をなし、三つ目となっている。胸にはドクロの首飾り（瓔珞）を付けている。各手には、弓、矢、輪宝（矛先が八方に出ている）、三つ叉の矛や剣を持ち、左手でショケラ（女人）の髪の毛をつかまえてぶら下げている。頭上の蛇、三眼、ドクロの瓔珞が描かれているのは珍しく、この三点は「陀羅尼集経」で説かれている通りとなっている。

青面金剛の足下には鬼が踏みつぶされている。この鬼は手足の指がそれぞれ三本しかない。その下には三猿がある。これは、山王日枝神社の山王権現の使いの猿が、庚申信仰の庚申の「申」と結びつき、さらに日光東照宮の三猿（三尸との説もあり）に影響を受けて三猿となったと考えられている。向かって右端は、神社の御幣を担ぐ見ざる。中央の言わざるの猿は臍が見られ、その下の陰部も表されて雌猿とわかる。当時は陰部に朱を塗って下の病を治そうとする庶民信仰が見られたのであろう。左端は、女性の臀部を連想させる桃を持つ聞かざる。猿は性欲の強い動物とされ、桃持ち猿は庶民の間では子授け、安産、下の病の祈願の対象となっていた。近くの西方村の鎮守、山王日枝神社からの影響を強く受けたのであろうか、下の病などに悩む女性を対象にした山王信仰の影響が如実に表されている。

この庚申塔は青木宗義の作で、江戸時代の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にも優れている。そ

の青木宗義は日光街道に面した草加宿の石工で、その子孫は現在の草加市神明一丁目の青木石材店である。

（5）越谷市内最古の庚申塔

図14は、市内最古の庚申塔で、越谷市の文化財に指定されている。造立年は「承応二年甲午無神月（十月）吉日」と刻まれているが、承応二年の干支は癸巳でなくてはならないのに、翌年の干支の甲午となっている。年号と干支の間に食い違いがあるが、地元の人にとっては干支の方が生活に密着しているので、干支の方が正しいと思われる。つまり、承応三年十月の造立と推定できる。

図15と16は、偶然にも同じ承応三年十月十五日の造立である。すると、この二基も市内で最古の庚申塔となり、現在文化財に指定されている庚申塔（図14）と合わせて三基が、市内最古の庚申塔といえる。

（6）特異な庚申塔

①百庚申

数にものをいわせ、たくさん作ればそれだけ多くの功徳もあろうかと百観音・五百羅漢・千体地蔵等が見られるが、その影響を受けた百庚申は寛政十二年（一八〇〇）の庚申の年から始まったと推定されている。

越谷市内では、西方の大聖寺に、天保六年（一八三五）の百基（現存は九十七基）の文字庚申塔（図3）とそれらを統括し供養する天保九年（一八三八）の百庚申供養塔がある。

②板碑型三猿庚申塔

図17は、板碑の形をした石塔に三猿のみを描いた江戸初期の庚申塔である。日月や青面金剛はまだ見られない。

③孝心塔

図18は、越谷市内の向畑の堂面の観音堂にある明治二年（一八六九）造立の庚申塔で、その裏面には「孝心で庚申さまを　よくおがめ　ねむりての身は　すぐにかうしん」と刻まれている。

鳩ヶ谷出身の小谷三志は不二道孝心講という一派を組織して富士講を広めていったが、この時、「孝心」の大切なことを説き広めた。「孝心」と「庚申」の音が同じことから、この影響が庚申塔にも見られたのである。庚申塔の上部に富士山を描いたり、「孝心」という文字が刻まれていたりすることもある。

④梵字庚申塔

図19は、青面金剛を梵字一文字「ウーン」で表した珍しい庚申塔である。大道二二二の三の川島家敷地内にある。

⑤道しるべが刻まれた庚申塔

図20は、享保八年（一七二三年）に建てられた、道しるべを兼ねた庚申塔である。中央には「庚申講中」と刻まれ、上部にある梵字は「ウーン」と読み、青面金剛と

いう仏を表わしている。石塔の両側面には次のように刻まれている。向かって右側面には「これより上ぢおん三里はん」、向かって左側面には「これより左、吉川へ壱里、大さかみ内」「これより右、市川まで五里」、つまり「ここから元荒川の上流の慈恩寺までは三里半」、「ここは大相模内で、ここから左へ行く元荒川沿いの土手道は吉川まで一里」、「右の葛西用水沿いの道は千葉県市川まで五里」という意味の道案内と道のりが刻まれていることがわかる歴史的に貴重な道標付き庚申塔である。遠くは下総国の市川との交流が忍ばれる。

⑥見田方地区の改刻塞神塔

図21～24の四基は、改刻塞神塔である。在来の庚申塔の表面を削除して「塞神」の文字を刻んだ改刻塞神塔がかつての忍藩（現在の埼玉県行田市周辺）に多い。これらは明治初年に忍藩の行った神仏分離政策の落とし子で、越谷市内では忍藩の飛び地であった見田方地区を含む柿木領八ケ村（柿木村、見田方村、南百村、四条村、別府村、千疋村、麦塚村、上谷を含む東方村）にも見られる。

⑦上谷の塞神改刻庚申塔

図25と26は、塞神改刻の青面金剛像庚申塔で、⑥の見田方と同様に忍藩の政策の影響を受け、「塞神」の文字を入れたものである。

（7）越谷市内にある男女平等の庚申塔

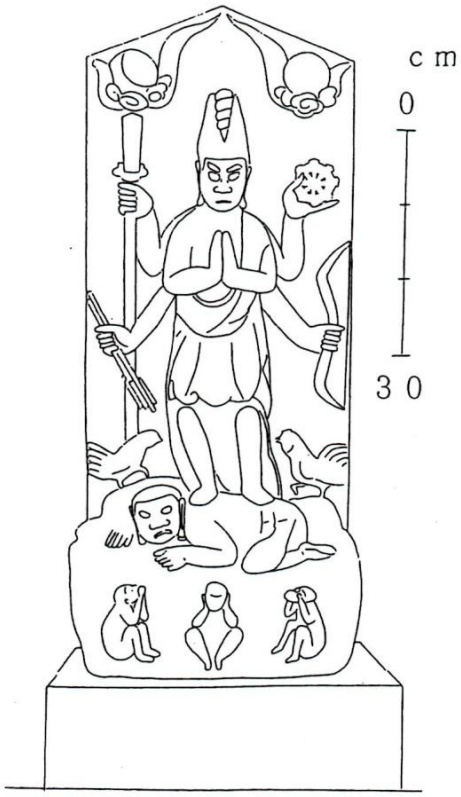
江戸時代の庶民の間で見られた男性の信仰は庚申の日に集まる「庚申」、女性は月の出を待つ「月待ち」と相場が決まっていた。しかし、越谷地域では、男性の庚申信仰に女性も関わっていることが判明した。

図27～31は、庚申塔を建てるにあたって、女性の名前が刻まれ、女性も一役かっていたことがわかる。特に図27～30は、女性のみによって建てられた庚申塔である。すべて三野宮の一乗院の参道にある。図31は、男女協力によって建てられた神道系の庚申塔である。図12の庚申塔も男女協力して建てられたものである。

江戸時代は、女性を男性より一段低く見る傾向があり、政治などの表舞台への進出は抑制されてはいたが、男尊女卑の差別が厳しくなったのはむしろ明治からであった。

このレポートに出てくる庚申塔の設置場所や詳細は、越谷市立図書館の二階に越谷市内の石仏に関する私の資料（L273カ）がありますので、参考にして下さい。

図1　平方の砂間の香取神社

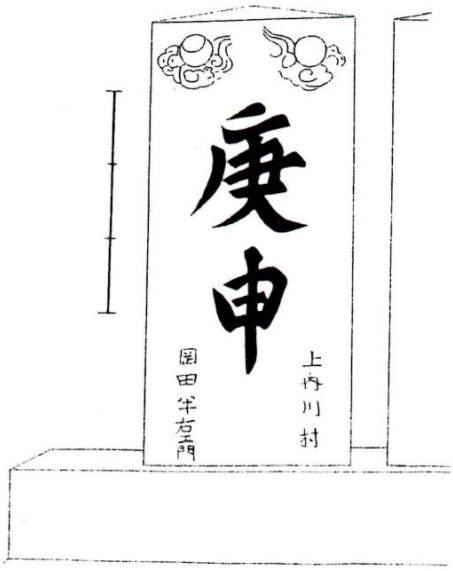


合掌型庚申塔

図2　平方の女体神社

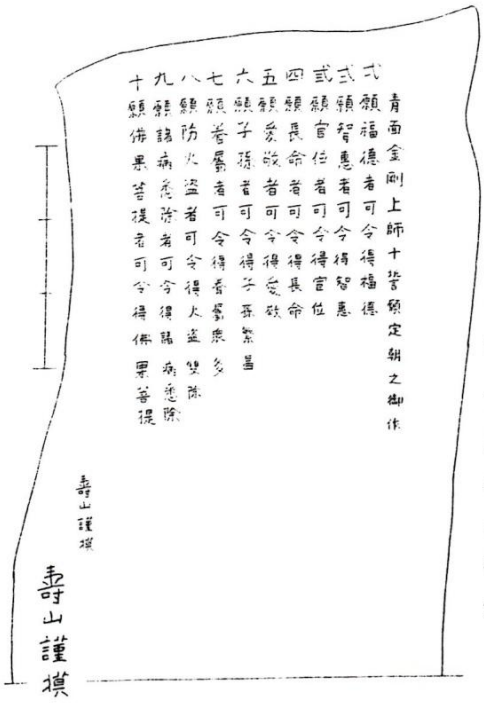
剣人型庚申塔

図3　西方の大聖寺



文字庚申塔

図4　西方の福寿院跡

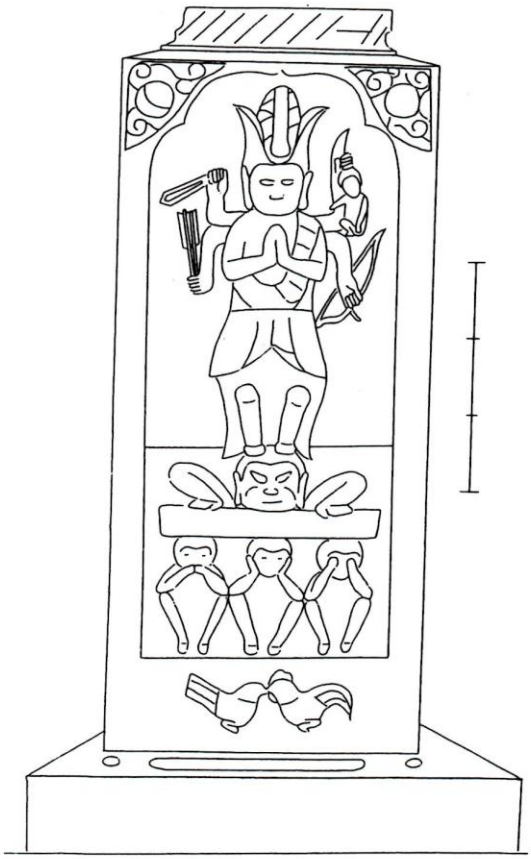


青面金剛の御利益塔

図5　野田市中野台の通称「庚申様」

猿田彦像庚申塔

図6　小曽川の久伊豆神社そば慈眼寺跡

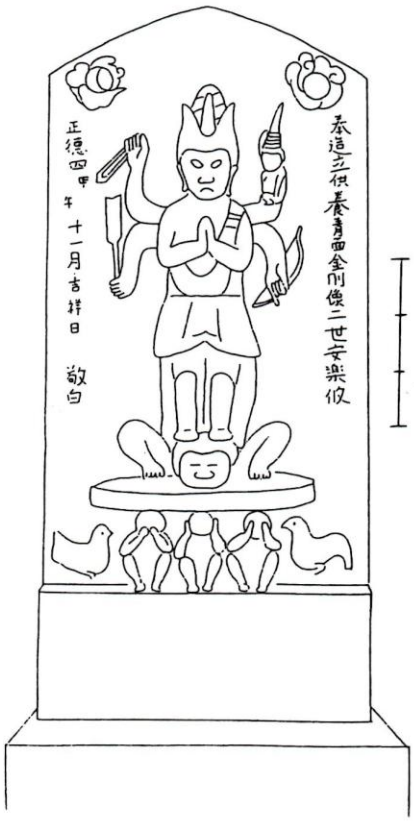


岩槻型庚申塔

図7　野島の久伊豆神社

岩槻型庚申塔

図8　大里の自治会館の秀蔵院跡

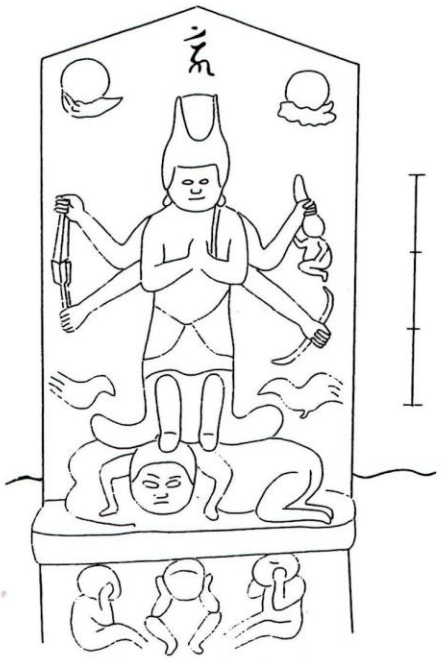


岩槻型庚申塔

図9　大林の香取神社

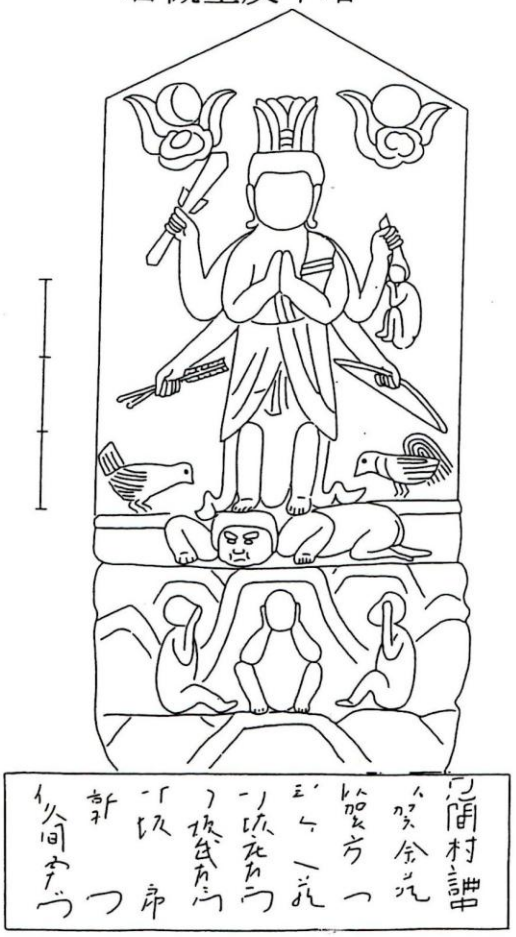
岩槻型庚申塔

図10　小曽川の藤井家そばの墓地



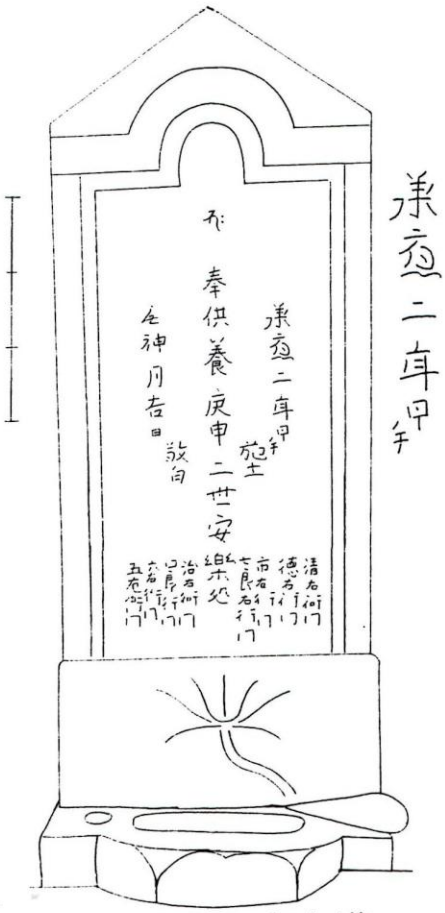
越谷型庚申塔

図11　恩間の勢至堂



越谷型庚申塔

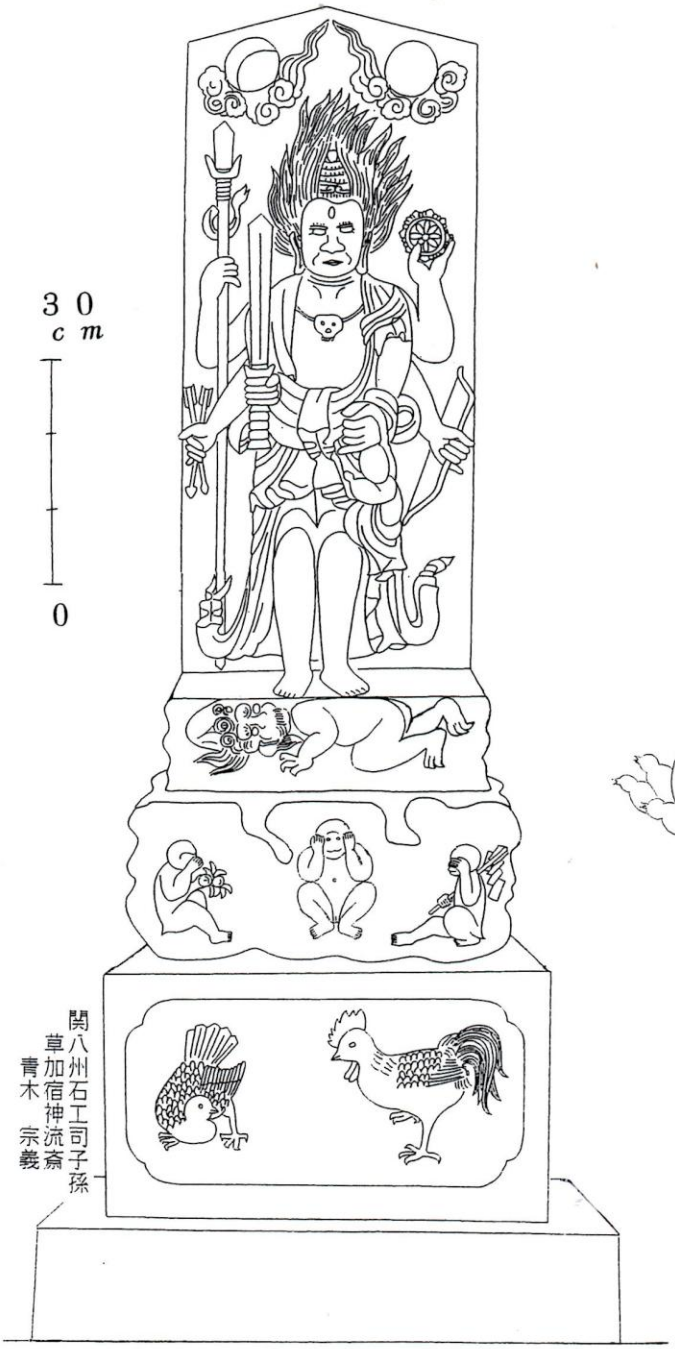
図14　東方の大相模公民館そば

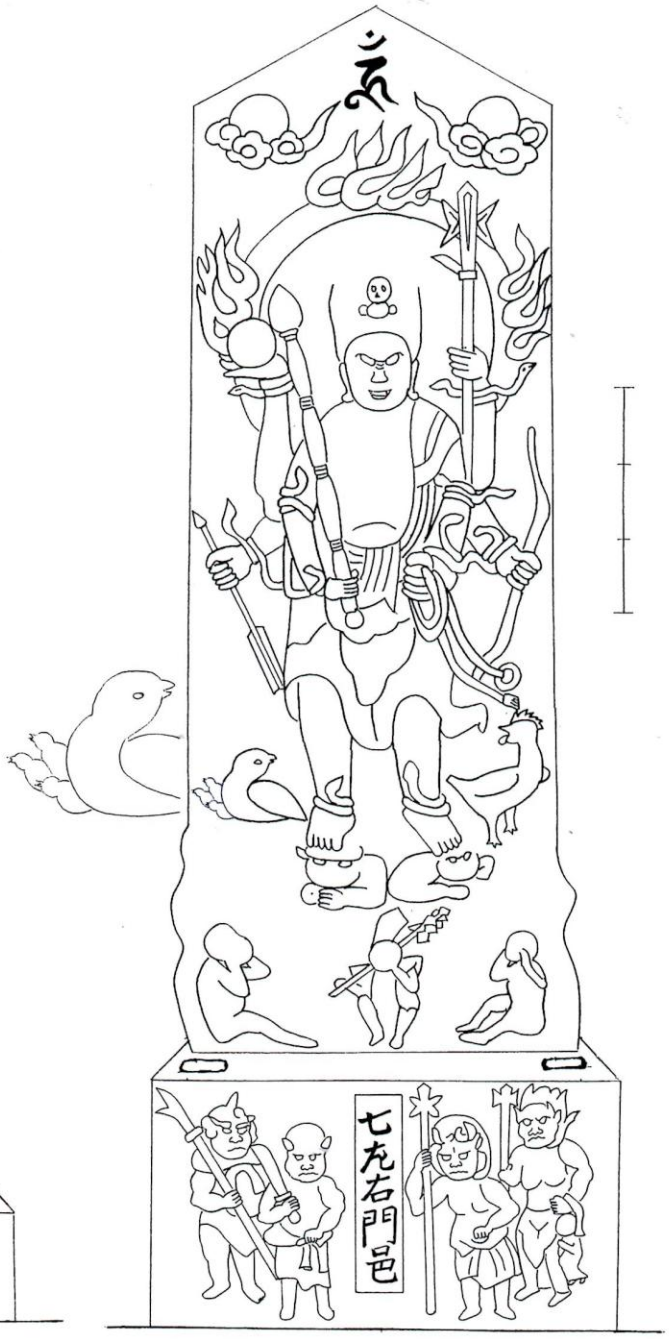


市内最古の庚申塔

図12
七左の観照院

図13
西方の大聖寺

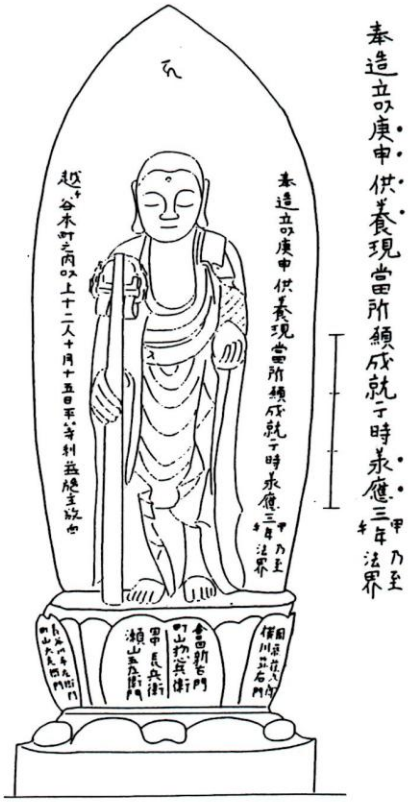




大聖寺の庚申塔

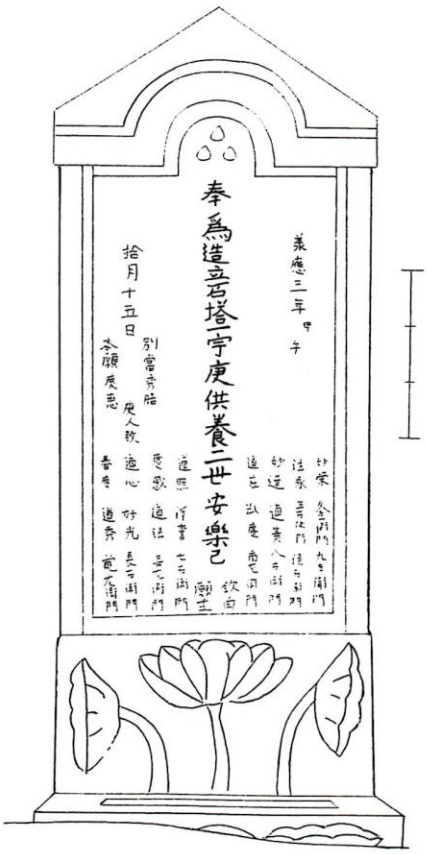
観照院の庚申塔

図15　越ヶ谷の天岳寺



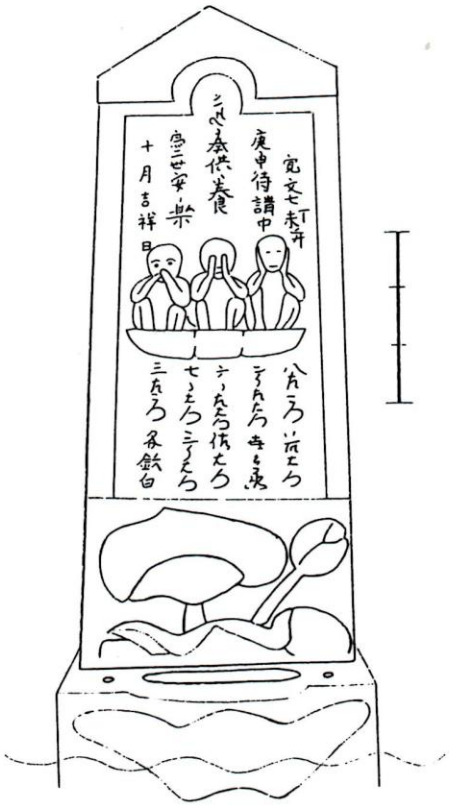
市内最古の庚申塔

図16　谷中の観音堂（西福院跡）



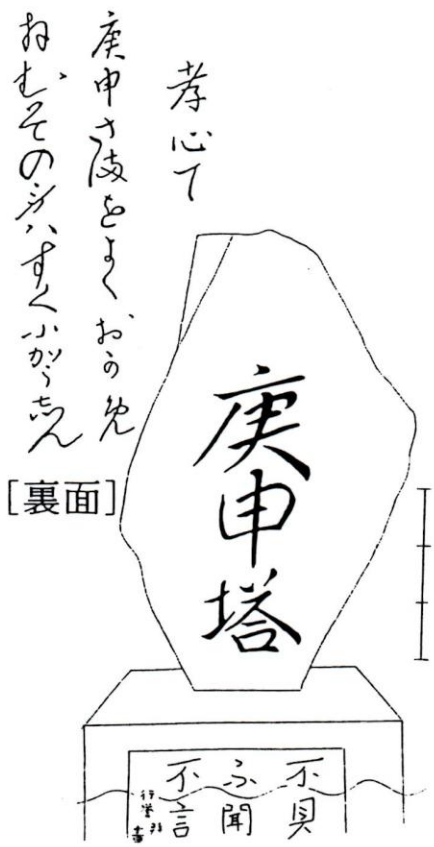
市内最古の庚申塔

図17　西方の大聖寺



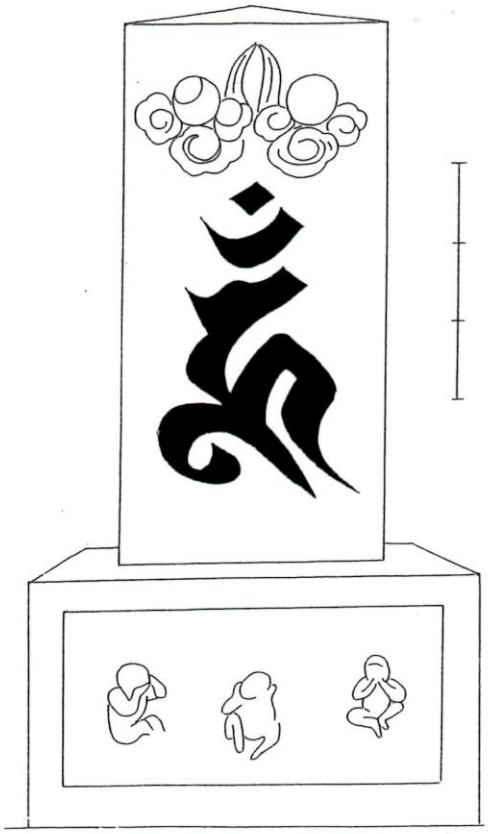
板碑型三猿庚申塔

図18　向畑の観音堂



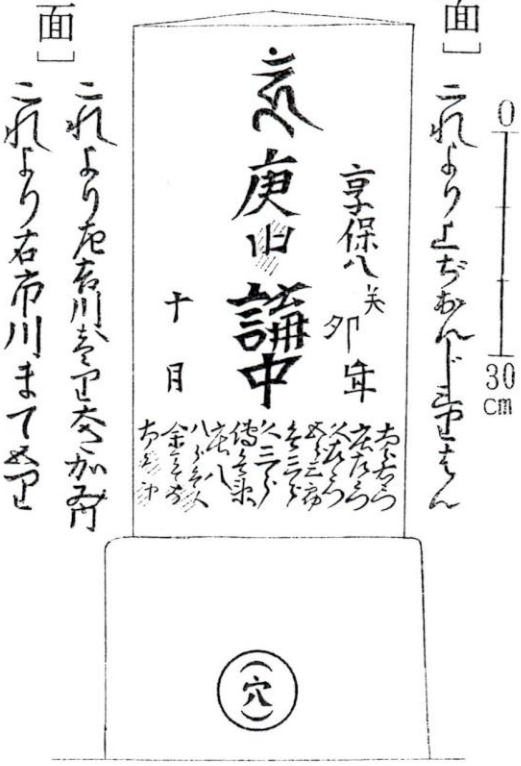
孝心塔

図19　大道二二の川島家



梵字庚申塔

図20　西方の葛西用水取水口

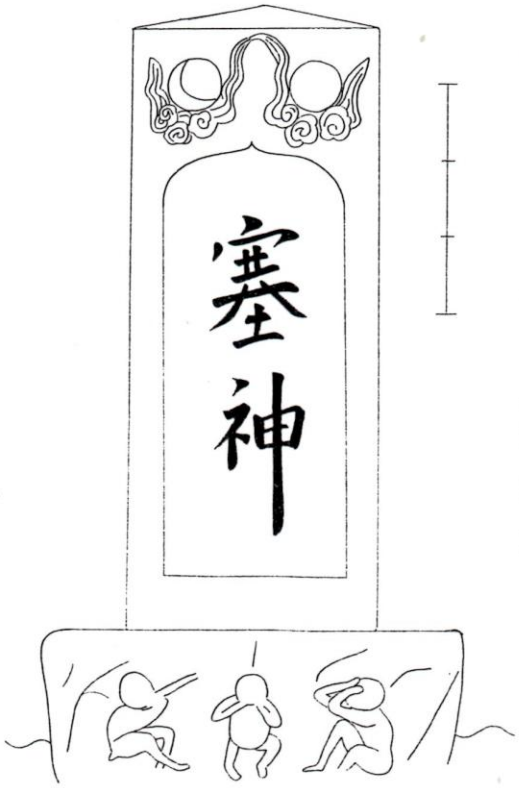


［側面］

［側面］

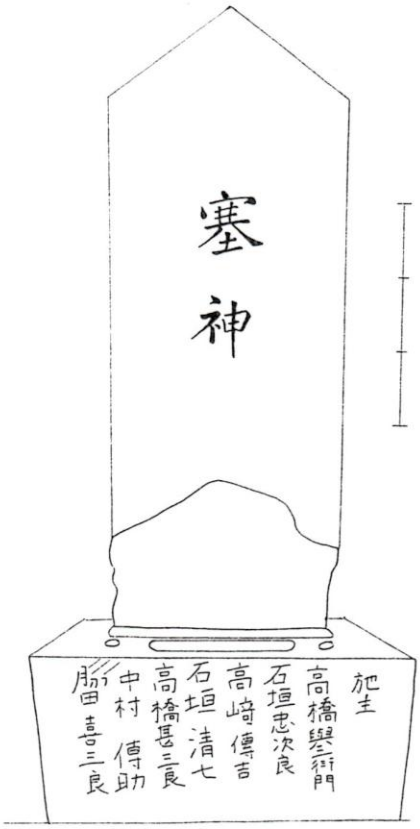
道標付き庚申塔

図21　見田方の八坂神社



改刻塞神塔

図22　見田方の後方自治会館南方の路傍



改刻塞神塔

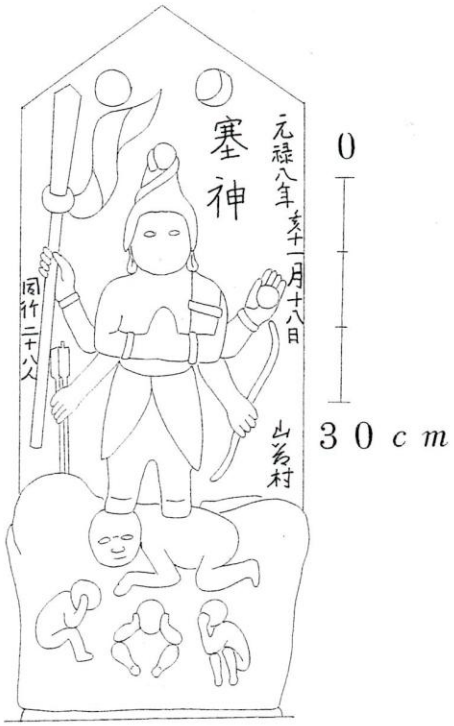
図23　見田方六ー三八二の宇田家路傍

改刻塞神塔

図24　見田方の大六天堂

改刻塞神塔

図25　上谷の稲荷神社

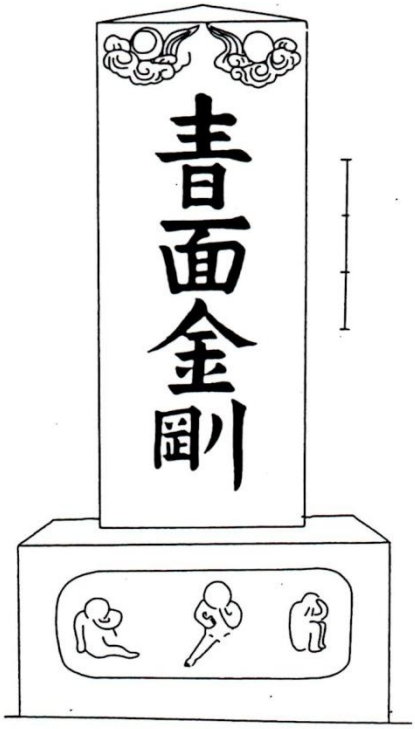


塞神改刻庚申塔

図26　上谷の稲荷神社

塞神改刻庚申塔

図27　三野宮の一乗院



［左側面］

天保四癸巳正月吉日

世話人

［台石］
坂巻内きよ
須賀内ほの
同　ぢき
倉橋ふせ
金子ゆり
同　るは
尾崎とみ
根岸さき
同　しさ
坂巻ひよ
同　のよ
鈴木よし

［右側面］

三ノ宮村

講中

［台石］
尾崎内かう
坂巻ゑて
榎本ゑつ
坂巻てま
同　つは
同　きん
同　みよ
同　ゑさ
森田さん
同　かん
同　のこ
小嶋まつ

女性のみによって建てられた庚申塔

図28　三野宮の一乗院

［左側面］

天下泰平国土安穏

風雨順時五穀豊饒

［台石］
根岸内と
同　ふか
尾崎内の
川辺内に
山口内じ
鈴木内の
小嶋内ら
須賀内
同　くけ
倉橋内つ
同　いの
榎本内み
同　はな
金子内たす
同　たも

［右側面］

安政二卯年　三ノ宮村

九月吉日　講中

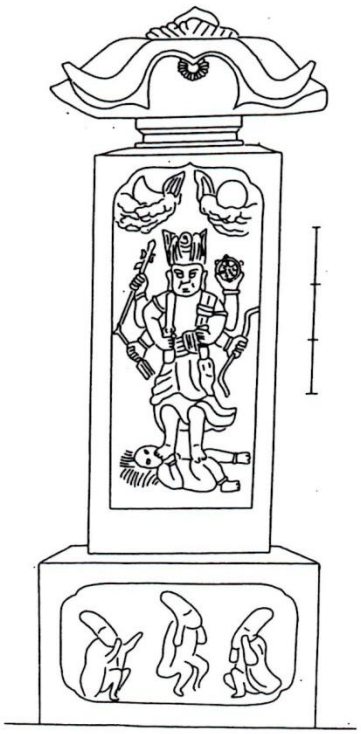
［台石］
世話人
惣治良
文左ヱ門
越ケ谷宿
石工長兵衛

女人講中

［台石］
尾崎内善
榎本内右
坂巻内ヱ
榎本内門
坂巻内を
同　んな
同　でな
同　みな
同　きま
同　つた
同　きと
同　ねか
同　りふ
同　てま
同　ゑた
森田内と
同　すひ
同　つき
同　くみ
同　のべ
同　るや
同　ゑな
同　てを
同　りん
金子内ち
同　ふと
同　ゆか
同　のや
同　さめ
同　ひと
同　きく
同　きの
同　つき
同　ふの
同　ふき
根岸内み
同　きや
同　のや

女性のみによって建てられた庚申塔

図29　三野宮の一乗院



〔左側面〕

文化四丁卯歳

〔台石〕

講中　セハ人
尾崎内□
坂巻内よ□
同　　きいよす
同　　ん
金子内へ
須賀内た
鈴木内け□
尾崎内よ□
同　　っ□

〔右側面〕

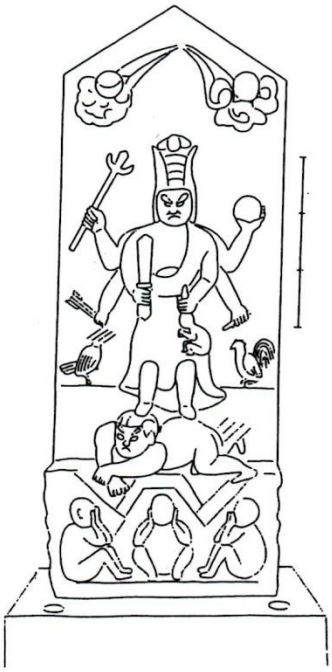
正月吉祥日

〔台石〕

坂巻内みつ
同　　すぁ
同　　とみ
同　　のよ
森田　　さつ
根岸内す
金子内は
坂巻内そ
須賀内め
倉橋内つ
河邊内ちのせんよ

女性のみによって建てられた庚申塔

図30　三野宮の一乗院



〔左側面〕

奉造立大青面金剛尊像一躯天下泰平
風雨順時庚申講中村内安穏如意圓満也

〔右側面〕

安永二癸巳十一月吉日

三野宮村
講中

かそ□は□□むよ　よみいつす
□め□□ん□め□　しやのやて

女性のみによって建てられた庚申塔

図31 大道の香取神社

〔右側面〕

文化十二乙亥三月吉日

小林弥右ヱ門
栗原七五良
鈴木長左ヱ門
同宇右ヱ門
栗原冨右ヱ門
同半右ヱ門
同喜左ヱ門
同与左ヱ門
同叶次
同長右ヱ門
川原次助助
同伊
栗原次右ヱ門
鈴木伊右ヱ門
栗原権七

〔左側面〕

村中安全

おいく
おるい
およし
おな□
お□ん
おし
おもよ
おつね
おまつめ
おひ□と
おし
おりん
おとめ
おきち
おきよ
おさよ
おつゆ
およね

〔正面台石〕

川嶋平左ヱ門
栗原長八
小林要蔵
栗原半六
小林初右ヱ門
栗原伝次
同権兵衛
川嶋勇蔵
同藤左ヱ門
同忠次良
栗原政五良
川嶋新蔵
同庄蔵
同幸蔵
同徳左ヱ門
栗原弥次右ヱ門
鈴木政右ヱ門
同儀左ヱ門

〔三猿〕

川嶋平左ヱ門
栗原長八
小林要蔵
栗原半六
小林初右ヱ門
栗原伝次
同権兵衛
川嶋勇蔵
同藤左ヱ門
同忠次良
栗原政五良
川嶋新蔵
同庄蔵
同幸蔵
同徳左ヱ門
栗原弥次右ヱ門
同儀左ヱ門

男女協力によって建てられた庚申塔